

命の尊さを理解し、自他の命を大切にすることを養う授業実践

赤澤 聡美

1年生の総合学習で、1歳未満の赤ちゃんとその保護者を招き、赤ちゃんに触れあうことで家族・周りの人への感謝の気持ちや、命の大切さを実感できるようにする「赤ちゃん抱っこ体験」を実施した。体験学習当日に向けて、道徳や保健指導の授業で「家族への感謝」や「命の尊さ」について授業を行った。今回実施した保健指導では、「生命の誕生」という視点から、受精卵ができる確率や命が誰から受け継がれてきたのかについて考えた。

精子が卵子のもとまでたどり着く様子をDVDで見たり、自分の命ができるまでにどのくらいのご先祖様がいたのかを考えたりすることによって、「自分や周りの友人が存在していることは奇跡であり、大切にしたい」と感じる生徒もみられた。しかし、「命の尊さ」について生徒自身で考え導き出すような授業ではなかったため、命の尊さを本当の意味で理解できていない生徒もあり、生徒自身で気付くことができるようにするために、どのように問いかけて授業を展開していくかが課題である。

1. はじめに

今回の保健指導では受精について取り上げているが、この内容は小学校の保健学習「育ちゆく体とわたし」でも学んでいる。保健学習では、「体は、思春期になると次第に大人の体に近づき、体つきが変わったり、初経・精通などが起こったりすること。」を理解できるようにすることを学習の目的としている。今回実施した授業では、精子・卵子が受精する確率や自分自身の命が誰から受け継がれているものかを考えさせることによって、自他の命が奇跡の連続によって存在している尊いものであることを理解させたいと考えた。

2. 学びの実際

(1) 命を大切にすることはどういうこと？

授業の最初に「の命を大切にすることってどういうこと？」という言葉投げかけた。に入る言葉を「自分」と「周りの人」でそれぞれ考えさせた。最初は挙手制で意見を求めたが、どう言うといいのか分からなかったのか、手を挙げるのが嫌だったのか、なかなか手が挙がらなかったため、数人を当てて発表してもらった。

教師：まず、自分の命を大切にすることってどういうこと？

祐太：健康でいる

駿介：食事に気をつける

結衣：交通安全

大晴：病気になるようにする

教師：自分自身の命を大切にするために大事なことだね。

じゃあ、家族や隣にいる友達とか周りにいる人の命を大切にすることってどういうことだと思う？

春香：人助け

大和：自己犠牲

翔太：暴力をふるわない

陽平：傷つける言葉を言わない

他者の意見を聞いて少しずつ笑顔が見られる生徒が増えた。

いくつか意見が出たところで、「なぜこんな風に自分や周りの人の命を大切にしないといけないの？」とさらに問いかけた。大切にされなければいけない命とは一体どういうものなのかを今から一緒に考えていこう、と授業の本題に入っていった。

(2) 自分の受精卵ができる確率

ここで、1枚の写真（受精卵の写真）を見せて、これが何かを尋ねた。隣の人や近くに座っている人と「これじゃない？」と小さな声で意見を言い合っているところで、1人の生徒から「受精卵」という言葉が聞こえてきた。受精卵というワードが出ると、「知ってる。」「聞いたことある。」という声が聞こえてきた。生徒達の表情を見ても、初めて聞いたような顔をしている子はおらず、小学校の保健体育の

授業などでこの単元を勉強していることが分かった。

次に「この受精卵は何と何からできたの？」と精子・卵子の写真を提示して問いかけた。この問いかけをしたとき、分からないという表情は見られなかったが、恥ずかしいからなかなか意見が出てこない。周囲の友達と顔を見合わせたり、小さな声で話したりしている様子うかがえた。しばらくすると、1人の男子生徒から「精子」という言葉が出てきた。精子という言葉が出てきたことで少し言いやすくなったのか、別の子から「卵子」という言葉が出てきた。精子・卵子の2つが一緒になることによって、受精卵ができることを再確認した。

受精卵は写真で見ると大きいですが、実際は顕微鏡で見ないと見えないほど小さい。この小さい受精卵が成長し、この世に生まれ、今の体の大きさまで成長していることを実感してもらうために、黒画用紙に針で小さな穴を開け、その穴から見える光を受精卵の大きさに例えた。

教師：写真で見ると受精卵は大きく見えるけど、実際はこの小さな穴の大きさくらいしかないんだよ。覗いてみて。

彩乃：えっ！小さい！

祐太：意外と大きい。

太一：本当にこれくらいの大きさなんですか？

教師：そうだよ。この小さい受精卵が、今のみんなの体まで大きくなったから、すごいよね。

黒画用紙の小さな穴を覗きながら、生徒一人ひとりが率直な感想を言っていく。身長が高い生徒には、周りの子からも「こんなに小さかったのに、今は大きくなったね」と話しかけている姿がみられた。



受精卵の大きさを確認している生徒達

そのあと、精子が子宮に入り、卵子のもとまで届

き、受精する様子を再現したDVDを観た。文章や図、イラストでも受精について理解することはできるが、映像を見ることによって、実際に精子がどのように子宮の中をたどり、卵子のもとまで行っているのか、また、どのように受精しているのかを、具体的にイメージしてほしいと考え、DVDを使用した。DVDを視聴している間の様子を観察していたが、ほとんどの生徒が真剣に画面をみていた。しかし、教室が暗くなったからか、少しぼんやりと見つめている生徒もみられた。

DVDを見終わってから

教師：卵子は何個ありましたか？

大和：1個

教師：じゃあ、精子は？

陽菜：たくさんあった。

教師：精子は子宮の中にたくさん入ってきていたけど、実際に卵子と受精していた精子は何個でしたか？

大輝：1個

教師：そうだね。子宮内にたくさん精子が入ってきていたけど、卵子と受精していた精子は1個しかなかったね。受精するときに卵子は1個しかなかったけど、実は女性が生まれたときから、体の中には400万個の卵子が入っているんだよ。じゃあ、精子はどれくらいの数が、男性の体の中にあると思う？

駿介：1000万

祐太：35億

結衣：3億個

教師：正解は、だいたい3億個くらいだよ。

駿介：結構多い！

ここで、400万分の1の卵子と、3億分の1の精子からできる受精卵は1200兆分の1の確率であり、自分や周りの人の命は1200分の1の確率で存在していることを伝えた。また、今回受精した精子が、もし卵子のもとにたどり着かなかつたら、もし卵子のもとまでたどり着いても他の精子が先に卵子と受精していたら、今の自分は存在していないことを伝えた。

この話の途中で、一人の生徒から「双子ってどうなっているの？」という疑問が出てきた。

教師：双子ってどうなっていると思う？

和也：1つの卵子に2つの精子じゃない？

愛理：でも、1つの精子が入った瞬間に卵子が固くなっ
たじゃん。

陸人：それか1つの受精助が分かれて双子になるの？

色々な意見が出てきたところで、一卵性双生児、
二卵性双生児で受精する卵子、精子の数が異なるこ
とを話す。なるほど、という表情をする子もいれば、
「じゃあ三つ子とかは、同じ瞬間に3つの精子が入
ったということ？」と驚いた表情をしている子もい
た。卵子に1つの精子が入った瞬間に卵子の膜が固
くなり、他の精子が入ることができなくなっていた
様子をDVDで確認していたため、同じ瞬間に2つ以
上の精子が入ることに驚きを感じたようだ。

(3) 命は誰から受け継がれているのか

これまで、自分の命のもとになった精子・卵子に
着目してきたが、次は自分の両親、祖父母、曾祖父
と命の繋がりについて話を進めていく。まずは、自
分を産んでくれた父・母2人、その両親を産んでく
れた祖父母4人、その祖父母4人を産んでくれた曾
祖父8人、と1代ずつ遡って確認する。5代前ま
で確認したところで、もしこの中の一人がいなかっ
たらどうなっていたかを聞いてみた。

教師：もし、このひいおじいちゃんがいなかったら、おば
あちゃんは生まれていた？

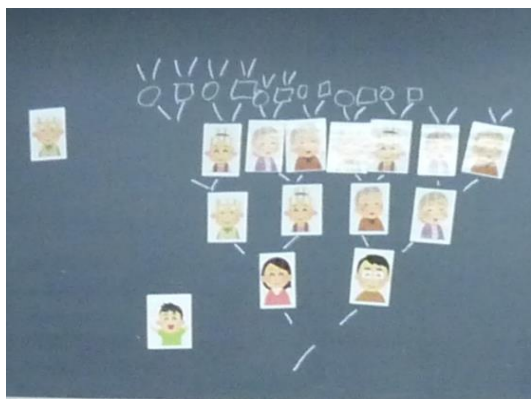
翔太：いなかった。

教師：じゃあ、お父さんは？

翔太：いない。

教師：じゃあ、今の自分は存在してる？

翔太：してない。



命が受け継がれていることを表した図

他のご先祖様でも、同様の質問をしたが、やはり

今の自分は存在しないという結論に至る。もし、ご
先祖様が一人でも存在しなかったら今の自分は存
在しておらず、ご先祖様一人ひとりの命も1200兆
分の1の存在であることから、その確率も踏まえる
と自分自身の命が存在している確率は1200兆分の
1よりも低いことになることを伝えた。

(4) 学習を振り返る

最後に、授業の最初に投げかけた「の命を
大切にするってどういうこと？」にもう一度戻った。
自他の命はたくさんの人から受け継がれており、奇
跡的な確率で生まれてきているからこそ、その命を
大切にしないといけない、また、だからこそ授業の
最初に出てきた意見のような命を大切にするため
の行動が大事である、という話をし、授業を終えた。

～生徒の感想（一部抜粋）～

「1200兆分の1でこの僕が生まれてきたことは、全部おじ
いちゃんやおばあちゃんなど、その上の親戚がいてくれたお
かげなのだと思います。これからは、親や親戚に感謝した
いです。」

「私は今日の授業を聞いて、こんなにいっぱい「きせき」
から私達は今いるんだなと思いました。普通なんてない、当
たり前なんてないと思いました。みんながいるのは、「きせき」
が重なって「きせき」から生まれてきているんだなと思った
ので、これからは、この「きせき」からもらった命を大切に
したいです。」

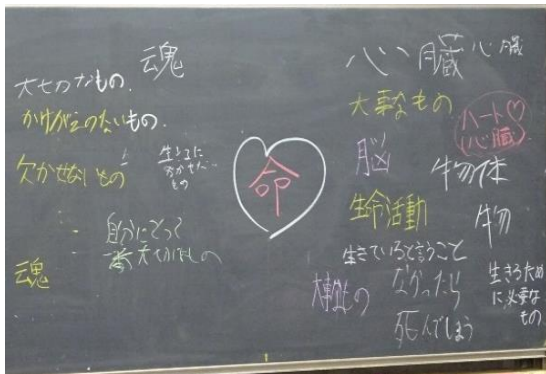
「1200兆分の1の確率で僕は生まれてきたから、これまで
よりも、もっと自分を大切にしていきたいです。また、自分
と同じように他の人のことも大事にしていきたいです。あと、
お母さんにも産んでくれてありがとうと言いたいです。」

3. 実践を振り返って

後日、命の誕生について道德の授業を行った際
に、授業の冒頭で、本時までの道德・保健指導の
授業を受けて「命とはどういうものか」について
生徒が自由に黒板に書いた。これまで学んだこと
から「かけがえのないもの」「自分にとって大切な

もの」などの言葉を書いた生徒もいた。しかし、なかには「物体」「心臓」といった言葉を書いた生徒もいた。そういった言葉から、命の尊さを本当の意味で理解できていないということが分かった。そうなった要因として、これまでの授業で命の存在について考えたときに、「命は尊いもの」という考えを自分たちで導き出したものではなく、教員が導いた部分が大きかったからだと考える。今回の授業の構成を考えていた段階で、どうすれば生徒自身が考え気付くことができるか検討したが、最終的には教員がDVDなどの教材を利用して気付かせるという内容にとどまってしまった。

教員が意図的に気付かせるだけの授業では表面的な理解にしかならず、改めて命の尊さについて問われると、教員の意図をくみ取りそれらしいことを述べるか、これまでの学びからの繋がりがないう自分自身の正直な思いを書くだけになってしまう。この気付きを、どのようにしたら生徒自身が導き出していけるのか、今後の課題としていきたい。



命とはどういうものか、生徒が記載したもの

【参考文献】草場一壽、「いのちのまつり」、サンマーク、2004